

「ソンミ虐殺」の地におけるヴェトナム 帰還米兵による「和解・共生」の試み A Vietnam Veteran's Project for Reconciliation and Harmonious Coexistence in My Lai 「マディソン・クエーカーズ」(MQI)と 現地ヴェトナム・コミュニティ The Madison Quakers, Inc. and Local Vietnamese Communities

藤本博
FUJIMOTO Hiroshi

1. はじめに——「マディソン・クエーカーズ」プロジェクト の意義と本稿の課題

1980年代後半以降、国際的な協力・交流、いわゆるNGO活動が興隆を見せる中で、ヴェトナム戦争をめぐる「戦争の克服」に向けた活動に関連して、戦争で多くの犠牲と苦難を経験したヴェトナム民衆との「和解・共生」を志向する活動が展開されてきた。このような活動の中で注目すべきは、ヴェトナムでの戦争体験を有するヴェトナム帰還兵のイニシアティブのもとで、ヴェトナム民衆との「和解・共生」に向けた試みが進められていることである。その代表例として、「帰還兵ヴェトナム復興プロジェクト」(Veterans Vietnam Restoration Project, VVRP、1988年創設)や「ヴェトナム友好村」(Vietnam Friendship Village、1998年開村)、「再生プロジェクト」(Project Renew、2001年創設)などの活動があり、本稿でとりあげる、ヴェトナム帰還兵のマイク・バイム(Mike Boehm)が主宰して進められてきた「マディソン・クエーカーズ」(Madison Quakers, Inc. 以下、MQIと略記。1994年開始)プロジェクトもその一環をなすものである。

MQIは、ヴェトナム戦争におけるアメリカの戦争行為を象徴する「ソンミ虐殺」の地である旧ソンミ村（現ティンケー村）とその周辺地区を支援対象としていることが特徴的である。MQIは、過去20年以上にわたって、ヴェトナム民衆自体を対象とする活動として「少額無担保融資」や「ミライ（ソンミ）平和公園」建設、小学校建設とその教育支援、「絵を通した文通」プログラム、「思いやりの家」建設、英語教育への教師派遣、「井戸掘削」などの活動を進めてきた。加えて、MQIは、ヴェトナム以外の地域にも射程を広げて、国際的次元における「平和創造」の普遍的試みとして、例えば、「ソンミ虐殺」40周年にあたる2008年3月には日本の被爆者4名を「ソンミ虐殺」の地に招聘する活動を展開してきた。

筆者は、以上のMQIの活動について、2014年に刊行した拙著『ヴェトナム戦争研究——「アメリカの戦争」の実相と戦争の克服』（法律文化社）の第7章及び第8章において考察したことがある¹。拙著においては、MQIが進める上記の活動内容を考察し、MQIの活動の意義として以下の二点を指摘した²。第一に、ヴェトナム民衆の戦争犠牲に着眼し、ヴェトナム民衆を射程に「外に開かれた」戦争認識を前提に、戦争で生み出された「憎しみ」を超えて「希望」を生み出すことを重視し、その「希望」を生み出す方法としてヴェトナムの人々との精神的な絆の構築を大切に「和解・共生」³にもとづく両国の人々の間における草の根的な平和的関係の構築をめざしていること、そして第二に、例えば「ソンミ虐殺」と「ヒロシマ・ナガサキ」に共通する民間人への無差別殺戮に着眼し、アメリカとヴェトナムという二国間の枠を超えて、射程を地理的に横に広げ、「ソンミ虐殺」を媒介にグローバルな視点からも市民レベルにおける「和解・共生」を創造する普遍的な試みとして展開してきたことにある。

本稿においては、拙著で考察した内容をふまえながら、MQIの活動が、（1）現地組織との密接な連携ならびに資金受給対象者との直接的触れ合いを重視した活動を展開していること、そして（2）「ソンミ虐殺」の生存者との触れ合いや関係構築への貢献を通して「ソンミ虐殺」の記憶継承の磁場としての役割を果たしていること、の二点について、上記の拙著では詳しく言及できなかった近年の活動内容を紹介しながら改めて注目する。そして、と

くにMQIの活動がその対象地域の現地ヴェトナム・コミュニティにどのような影響を与え、MQIがどのような役割を果たしてきたかについて明らかにしたい。

以下の叙述にあたっては、上記二点に関連して、拙著刊行準備過程以降に筆者が新たに得た事実ならびにMQIが進めている新たな活動内容を組み込んである。ただ、一部は、拙著の内容と重複する部分があることをお断りしておきたい。

2. 現地組織との密接な連携ならびに資金受給対象者との直接的触れ合いのもとでの活動の展開

(1) 「少額無担保融資」(Micro-credit Loans) の特徴⁴

MQIの様々な活動の中で現地組織との密接な連携と資金受給対象者との直接的触れ合いを象徴しているものが「少額無担保融資」プログラムである。「少額無担保融資」プログラムは、MQIのプロジェクトとしては最初のもので、当初虐殺があった旧ソムミ村（現ティンケー村）を対象に1994年1月に3,000ドルの資金提供をもとに「ミライ貸付資金」(My Lai Loan Fund)の名称でスタートし、その後、対象の村は旧ソムミ村以外の周辺地域に拡大され、今日まで20年以上の長きにわたって続いている。これまで、旧ソムミ村の位置するクアンガイ省を中心に、旧ソムミ村とその周辺の15の村、合わせて16の村に居住する3,000人以上の女性が融資を受けてきている。

この「少額無担保融資」プログラムの特徴は、バングラデシュにおいて農村における貧困女性を対象に「少額無担保融資」を行っているグラミン銀行をモデルとするもので、MQIのプログラムにおいても、これまで貧困女性（戦争未亡人を含む）を対象に、貸与ベースをもとに融資を行い、返済された資金を他の女性への貸付に当てる、言わば循環型の貸付融資プログラムとして展開されてきた。そして、貧困女性たちがその資金をもとに、エンパワーメント（empowerment）を図ることを重視して、経済的な自立を促し、家族の生活安定の確保が可能となるよう支援することがその目的となってきた。

ている。

ここでMQIのプログラムで特徴的なことを指摘すれば、「少額無担保融資」プログラムをはじめとして大部分のMQIのプログラムがそうであるように、以下の二点を指摘できる。

第一は、支援対象の旧ソンミ村とその周辺地区の現地関係機関と連携を密接にとり、しかも現地関係機関の直接的イニシアティブにより各プログラムが進められていることである。「少額無担保融資」プログラムに関しては、約20万人の女性がメンバーとなっている地元の女性組織「クアンガイ省女性同盟」(The Women's Union of Quang Ngai Province)がMQIから貧困女性を対象とする融資のための資金を受け取り、その資金を管理し、「少額無担保融資」プログラムの運用と運営にあたっている。そして「クアンガイ省女性同盟」は、貸付資金の受給者と直接面談するとともに(写真参照)、定例の会合を開催し、資金をもとに貧困女性たちが従事している牛や豚の飼育や小ビジネスの進捗状況について意見交換を行ってきている。また、保健衛生と家族計画に関する講座も行われてきた。

第二は、現地の関係機関でMQIのプログラムにかかわる人々やMQIからの資金受給者の人々との直接的な触れ合いを大切にして活動が進められていることである。MQIの主宰者のベイムは毎年、「ソンミ虐殺」追悼式典が開催される3月16日前後の時期にヴェトナムを訪問し、現地コーディネー



「クアンガイ省女性同盟」が貸付資金受給者(写真奥)を確認している様子
(出典)MQIのウェブサイト <http://www.mqivietnam.org/loan-fund> [2016年2月6日アクセス]

ターであるファン・ヴァン・ドー (Phan Van Do) とともに、これらの人々を訪問し、とくに資金受給者ならびにその家族と直接的な触れ合いを持つことを大切にしてきた。「少額無担保融資」プログラムに関しては、ベトナムが、こうした触れ合いの中で、貸付資金の受給者である貧困女性が経済的自立を達成するとともに、戦争による精神的傷痕を克服していく姿を目の当たりにすることになり、「少額無担保融資」プログラムが経済援助に留まらず、「精神を癒す役割も果たしている」ことに気づいていくことが興味深い。

(2) 「少額無担保融資」プログラムの近年における事例

「少額無担保融資」プログラムは、前述のように、現在では、対象の村は旧ソシミ村以外の周辺地域に拡大され、しかも少額の資金提供を受けてきた貧困女性は、従来のエビの養殖等に加えて、2002年以降は子牛や豚、水牛の飼育、そして近年では市場での販売に向けた小魚の加工の仕事に従事する活動が進められている。

子牛や豚、水牛の飼育に関する事例を一つだけ紹介すれば、旧ソシミ村と同じソンティエン県にあるギアソン (Nghia Son) 村に住む女性ファム・ティ・ピエンさんは、MQI からの貸付資金をもとに4頭の水牛と1頭の子牛を育てることで得た収入をもとに自分の家族の貧困状況からの脱却が可能となっている⁵。

そして、2013年9月から「少額無担保融資」プログラムの一環として新たに進められているのが、旧ソシミ村の周辺地区にあたるティンキー (Thin Ky) 村を対象とした「魚の加工」(Fish Processing) プログラムである⁶。このプログラムは、「クアンガイ省女性同盟」と連携し、現地の貧困女性を対象として進められている。そして、このプログラムの目的は、地元でとれた小魚を加工する仕事に従事する資金を提供するもので、貧困女性たちが収穫された小魚を調味料ヌックナム向けや干物として加工し、それらを近くのクアンガイ市の市場に運ぶ仕事をすることで生計の糧とすることができるよう援助し、貧困女性たちの自立を支援することにある(次ページ写真参照⁷)。ティンキー村で行われているこのプログラムでは援助対象の女性には一人当たり月0.65%の低い金利のもとで1,000万ドン(日本円で約5万



ティンキー村の漁港(2014年2月)
ファン・ヴァン・ドゥー撮影



収穫された小魚を蒸し、干している様子(2014年2月)
ファン・ヴァン・ドゥー撮影



女性が加工した小魚をクアンガイ市の市場へ運ぶ姿
(2014年2月) ファン・ヴァン・ドゥー撮影

円) が提供された⁸。2014年2月の時点では、小魚が豊漁で、小魚の加工は順調に進んで、貧困女性の生活基盤が改善されることになったとのことである⁹。

「少額無担保融資」プログラムについて言えば、ここ1～2年は新しいプログラムの実施は行われてきていない。MQIは「少額無担保融資」

を一時中断する前の数年間に約4,500ドル(約50万円)の資金提供を行ってきており、2016年中に「少額無担保融資」継続に向けて新たな計画を策定しつつあるとのことである。ただ、新たな計画を進めることができるかどうかは、ベトナム現地のインフレにより貨幣価値が半減していることもあり、MQIとしてどれだけの資金を今後提供できるかにかかっているようである¹⁰。

(3) 「井戸掘削」(Wells for Water) プログラム

MQIの活動の重要事業の一つとして現在進められているのが、「井戸掘削」プログラムである。この事業は、2011年に地元の人民委員会の要請により、きれいな水の水源確保が難しいクアンガイ省内の山間のギアト(Nghia Tho)村の一集落を対象として、2012年3月に開始されたものである。ここでは、最近の状況を述べることで、現在の「井戸掘削」プログラム

の進捗状況とその意義について言及しておきたい。

ギアト村はヴェトナムの少数民族の一つであるハレ（Hre）族が住む村で、やや古いデータではあるが、2012年において村の住民の7割は貧困状態に置かれていた。なぜこの地域で「井戸掘削」プログラムが重要であったかと言えば、このギアト村のようにクアンガイ省内の山間の村にある従来の井戸は夏の時期には乾ききってしまい井戸水を汲み上げることができない状況にあったからである。これらの集落では年間に井戸水は8カ月間しか利用できない状況にあり、村の少数民族の人々の貧困状況を克服するために、年間にわたって利用できる水資源確保のための井戸を村の住民が確保することが重要であると、地元の人民委員会が考えたからであった。

ギアト村での井戸掘削作業は、これまでヴェトナム政府が進めてきたクアンガイ省内の井戸掘削作業の80%は失敗に終わっていることもあって困難を極めた。しかしながら、2012年7月に井戸掘削作業は成功を見た。2012年3月に作業を始めてから4カ月後のことであった。ここで興味深いことは、井戸掘削にあたって、MQIの現地コーディネーターであるドーのイニシアティブと彼の献身的な努力のもとで業者との協働作業としてこのプログラムが進められたことである。MQIは、この「井戸掘削」作業に7,870ドルの資金を投入した¹¹。

その後、MQIは約1年半にわたって、同じギアト村で2か所目の井戸掘削作業を試みてきた。上記の最初の井戸掘削以上に作業は困難をきわめ、4か所目でようやく水を汲み上げる場所を見つけることができた。地元の人民委員会はギアト村の人口増で村の中心部から住民を移動させることが必要だと感じていたが、2か所目としてきれいな水の水源が恒常的に利用できる場所が見つかったことで、きれいな水へのアクセスができるようになり、その場所周辺へ



井戸掘削の作業

(一番左が現地コーディネーターのファン・ヴァン・ドー)
(出典)MQIのウェブサイト

<http://www.mqivietnam.org/wells-for-water>
[2016年2月6日アクセス]

の1,000人以上の人の移動が可能となった。この意味で、2か所目の井戸掘削が成功したことは、水資源の確保によって村の安定的な生活基盤が確保されたという点で重要な意味をもつものであった¹²。

3. 「ソンミ虐殺」の記憶継承の磁場としての役割 ——「ソンミ虐殺」生存者との触れ合いと関係構築への貢献

次にMQIが果たしている役割として注目したい点は、MQIが「ソンミ虐殺」の生存者との触れ合いや関係構築への貢献を通して、「ソンミ虐殺」の記憶継承の磁場としての役割を果たしていることである。以下、この点を象徴する二つの事例を主として紹介してみたい。

(1) ヒュー・トンプソン (Hugh Thompson)、ラリー・コルバーン (Larry Colburn) とドー・バー (Do Ba) との触れ合い

最初に言及したいのが、「ソンミ虐殺」があった際に地上で異様な事態が起こっていることに気づき自ら乗っていた偵察ヘリを現場に着陸させ、子どもを含む10名余の村人を救助したヒュー・トンプソン、ラリー・コルバーンと彼らが救助した際に8歳であったドー・バーとの触れ合いについてである。後述するように、2001年3月におけるヒュー・トンプソン、ラリー・コルバーンとドー・バーとの初めての再会の機会を可能にしたのが、MQIのコーディネーターのファン・ヴァン・ドーであった。

「ソンミ虐殺」時に村民を救った米兵がいたということが、ヴェトナム戦争終結後、アメリカとヴェトナム双方の相互理解を促進するうえでの触媒となることもあって、1998年3月に虐殺があった現地で開催された「ソンミ虐殺30周年記念式典」にヒュー・トンプソンとラリー・コルバーンが参加したことがあった。この折に、トンプソンとコルバーンは、彼らが救助した村人たちと再会する機会を持った（この時点ではこの村人たちのなかにバーはいない）。そしてこの折に、MQIの主宰者のベイムと現地コーディネーターのドーは、MQIが当時「ソンミ虐殺」現場から約1.6km離れたところに建設を考えていた「ソンミ平和公園」(My Lai Peace Park)の鍬入れ式に

トンプソンとコルバーンを招いたのであった。

上述のように、トンプソン、コルバーンとドー・バーとの初めての再会は2001年3月のことである。このきっかけは、トンプソンとコルバーンが1998年3月にヴェトナムを訪問した際にヴェトナムの新聞『タイン・ニエン』（*Thanh Nien*）紙にバーが存命であり、窃盗の罪で8年の刑に服しているとの記事を読んだことに遡る。その後、2001年に入って、ベームとファン・ヴァン・ドーは、バーが刑務所での服役が解かれ普通の生活に戻っていることを知るのだが、バーがどこに住んでいるかは情報が得られない状況であった。こうした状況の中で、ファン・ヴァン・ドーはバーの消息を探しあてる努力をし、上記の記事を掲載した『タイン・ニエン』（*Thanh Nien*）紙の編集長の協力もあって、バーの消息をつきとめ、こうして、「ミライ平和公園」開所式が行われた2001年3月に招かれたトンプソン及びコルバーンとバーとの初めての再会が実現することになったのだった。バーは、「ソンミ虐殺」の際、母と二人の兄弟姉妹を亡くし、その後、刑務所に服役するなど長らく失意のもとにあったが、2001年3月にバーが自らの命を救ってくれたトンプソンとコルバーンに出会うことになったことは、バーにとっては「家族」を得たような気持ちで、その後に辛い精神状況を克服するきっかけを得る機会となった¹³。

その後、コルバーンは、バーとは「ソンミ虐殺」40周年記念式典があった2008年3月にも再会している¹⁴。拙著で取り上げたことだが、コルバーンは、バーがその後結婚し、この式典に妻と2歳になる娘と参加しており、孤独で失意のもとにあったかつての姿から立ち直っているのを見て、生きていくことへの強い意志を持つことの素晴らしさを感じるようになるのである¹⁵。

(2) ファム・タイン・コン (Pham Thanh Cong) 「ソンミ虐殺記念館」館長をめぐって

もう一つの事例が、「ソンミ」虐殺の生存者の一人でもあり、現在、「ソンミ虐殺記念館」館長を務めるファム・タイン・コン館長との関わりである。

MQIが2008年3月の「ソンミ虐殺」40周年記念式典に日本から被爆者を招聘した成果の一つとして、この被爆者の旧ソンミ村訪問を契機に、その

数カ月後の同年8月上旬に「ソンミ虐殺記念館」のコン館長らが原水爆禁止世界大会への参加などの目的のため広島と長崎を訪問したことをあげることができる。コン館長は、広島を訪問した際、広島平和記念資料館を見学するとともに、スティーブン・リーパー (Steven Leeper)・広島平和文化センター理事長(当時)と前田耕一郎・広島平和記念資料館長(当時)の両氏に会い、その会合の場で、両博物館の交流が話題にのぼった。

「ソンミ虐殺記念館」では、2階の展示コーナー入口付近に虐殺された504名の氏名が刻印された黒色の巨大な陶板の横にトンプソンとコルバーンの当時の顔写真が説明文とともに掲げられており、虐殺当時村人に思いを馳せた米兵が存在したことを紹介することで、アメリカとの「和解」の気持ちを表そうとするヴェトナム側からのメッセージを受け取ることができる。ただ、「ソンミ虐殺記念館」は主に虐殺当時の米軍従軍カメラマンであったロナルド・ヘイベリ (Ronald Haeberle) が撮影した写真が主として展示され、虐殺の悲惨な状況を訪問者に知らせることが中心となっている。

2008年8月にコン館長が広島を訪問してから約8年近くを経た本稿の執筆時点(2016年2月)においても上記の展示の状況は基本的に変わっていないようである。しなしながら、いずれ広島平和記念資料館はじめ世界における過去の戦争と現在の紛争地域に関する他の博物館との情報交換と交流が進み、生存者の証言(未来に生きる姿勢も含めて)や歴史的展示を組み込んだ記念館の展示の充実がなされて、将来的に「ソンミ虐殺記念館」が平和博物館としての機能を果たすことで、広い歴史的文脈の中で「ソンミ虐殺」の記憶が継承されていくことが期待される¹⁶。

以上、二つの事例を紹介したが、補足的にMQIが「ソンミ」虐殺生存者の触れ合いと関係構築への貢献をしていることに関して、二点紹介しておく。

第一は、「ソンミ虐殺」当時12歳で、18人の親族と家族を失い、この事件後、「生存者」の一人としてハノイや西ドイツにおいて「ソンミ虐殺」当時の状況をもとに米軍の戦争行為の残虐性を語った経験を持つヴォー・ティ・リエン (Vo Thi Lien)¹⁷の墓がMQIによって建設された「ミライ平和公園」の一角にあることである。リエンは1997年に出産がうまくいかず不幸にも

死亡し、その墓が「ミライ平和公園」建設予定地内に置かれていた。1997年時点は「ミライ平和公園」建設が具体化していく状況にあり、MQIの主宰者であるベイムが地元の人民委員会に要請し、リエンの親族もそれを希望したことから、リエンの墓が「ミライ平和公園」の一角に置かれることになったものである¹⁸。

第二に、2013年3月には、「ソンミ虐殺」時に米軍従軍カメラマンで虐殺時の写真を撮影したヘイベリがソンミの現場を訪問した際、MQIの現地コーディネーターのファン・ヴァン・ドーがドー・バーなど「ソンミ虐殺」の生存者とヘイベリとの面会をアレンジしていることである¹⁹。

以上、エピソード的いくつかの事例を紹介してきたが、以上の事例から、MQIが「ソンミ虐殺」の生存者との触れ合いや関係構築への貢献を通して、「ソンミ虐殺」記憶継承の磁場としての役割を果たしていることが理解できる。また、「ソンミ虐殺」40周年にあたる2008年3月に日本の被爆者4名を「ソンミ虐殺」の地に招聘したMQIの試みとその成果²⁰も、この折に「ソンミ虐殺」の生存者との交流の機会が設けられたわけではなかったが、MQIが「ソンミ虐殺」記憶継承の磁場としての役割を果たしている一事例と考えることができる。

4. おわりに

本稿においては、MQIが、(1) 現地組織との密接な連携と資金受給者との直接的触れ合いのもとでの活動を展開していること、そして(2) 「ソンミ虐殺」の生存者との触れ合いや関係構築への貢献を通して「ソンミ虐殺」の記憶継承の磁場としての役割を果たしていること、の二点に注目してきた。最後に、以上の二点に関連して、MQIが現地のヴェトナム・コミュニティにどのようなインパクトを与えているかについてまとめ、本稿の結びとしたい。

上記第一の点で繰り返して言えば、MQIの活動は、本稿でとりあげた「少額無担保融資」や「井戸掘削」プログラムに見られるように、現地組織の要請とイニシアティブをもとに活動が展開され、しかもMQI主宰者のベイム

と現地コーディネーターのファン・ヴァン・ドーが資金支援の現場を定期的に訪ね、資金受給者との直接的な接触を大切にしていることに特徴がある。そしてMQIの活動は、途上国に対する援助政策で今日求められる援助のあり方に合致するもので、貧困女性など資金受給者の自助と自立を支援するとともに、コミュニティの生活基盤の改善を目的として行われてきた。これまでの20年以上におよぶMQIの全体の活動を通し、資金提供対象地域は旧ソンミ村とその周辺地区の20の村に拡大され、提供されてきた資金は約90億ドン(約4680万円)に及んでいる²¹。

そして、上記の特徴と目的のもと、「ソンミ虐殺」があった旧ソンミ村とその周辺地区に住む、「少額無担保融資」を受けてきた3,000人以上の貧困女性をはじめとして、それ以外のプログラムの対象になっている貧困家庭や枯葉剤犠牲者を持つ家庭、そして近年では社会的に厳しい状態に置かれている少数民族のハレ族など多くの人々の自立の達成に大きく貢献してきている。また、旧ソンミ村とその周辺地区の地域コミュニティの社会的・経済的発展が促され、それら地域の生活基盤が改善されるうえでMQIが大きな役割を果たしてきたと言える。

こうして、MQIは、資金難点などいくつかの困難をかかえながらも、これまで20年以上にわたる地道かつ持続的な草の根的な活動によるこうした成果をもとに、「クアンガイ省女性同盟」などの様々な現地組織や行政機関にあたるクアンガイ省人民委員会やその下部組織である県・村の人民委員会のみならず、地域住民からも高い評価と敬意を得てきていることをここでは確認しておきたい。さらに言えば、ヴェトナム帰還兵のベイムが主宰するMQIがこのような評価と敬意を得てきたことで、旧ソンミ村とその周辺地域の地域住民のヴェトナム戦争にまつわるアメリカに対する憎しみが緩和され、ヴェトナム戦争を象徴する「ソンミ虐殺」の地で草の根的な「和解・共生」の営みが定着してきていることが理解できるのである。

第二に、「ソンミ虐殺」の生存者との触れ合いや関係構築への貢献を通して「ソンミ虐殺」の記憶継承の磁場としての役割を果たしていることについて言えば、「ソンミ虐殺」の生存者は現在20人弱という少数であり、日本の広島・長崎の被爆者のように自らの犠牲の実相を語り、平和に向けたメッ

セージを発することもなく、組織化もされてはいない。また、「ソンミ虐殺記念館」は、前述のように、「ソンミ虐殺」の実相を伝えるものではあっても、平和のメッセージを発信する「平和博物館」としての機能を現在有しているとは言えない。しかしながら、こうした状況のもとで、「ソンミ虐殺」生存者との触れ合いや関係構築への貢献が引き続き行われ、MQIが何らかの形で「ソンミ虐殺」の記憶継承の磁場としての役割を今後も引き続き果たしていくことが期待される。

最後に付言すれば、米軍による民間人に対する虐殺は「ソンミ虐殺」にとどまるものではないことは戦争当時から言われており、近年では米軍の一次史料に基づくニック・ターズ（Nick Turse）の研究によって、アメリカの戦争政策の帰結として、少なくとも320件にのぼる虐殺や捕虜虐待があったことが明らかになっている²²。加えて、ヴェトナムに派遣された韓国軍が行ったヴェトナム民衆に対する虐殺事件について研究が進められている。ただ、現在のヴェトナムでは、政府レベルで中国との関係もあって米越関係の緊密化が重要視される中で、米軍や韓国軍による民間人に対する虐殺事件の記憶が封印される傾向にあり、なかでも韓国軍による虐殺の地における米韓両国の民衆レベルでの和解の試み自体が難しい状況に直面していると言われる²³。

このような状況を考えた場合、ヴェトナム帰還兵のマイク・ベイムが主宰するMQIの活動は、「ソンミ虐殺」の地である旧ソンミ村とその周辺地区において、現地ヴェトナム・コミュニティにおける貧しい人々の自立やそれら地域の生活基盤の整備ならびに社会的・経済的發展に積極的役割を果たすとともに、「ソンミ虐殺」生存者との触れ合いや関係構築への貢献を通して「ソンミ虐殺」記憶継承の磁場としての役割を果たしてきたという意味で、注目に値するものであると言える。そして、MQIによるヴェトナム戦争を象徴する「ソンミ虐殺」の地における上記の草の根的な「和解・共生」の営みが可能になっているのは、「ソンミ虐殺」というヴェトナムはもとより世界的にも広く認知された場であるが故の特有な状況であるのか、あるいは今後、MQIの活動がヴェトナム南部における他の虐殺の地にも波及しうる普遍的な活動として可能性を持つものか、今後を見守りたい。

1. 藤本 [2014: 224-267, 268-288]
2. 藤本 [2014: 283-285]
3. 本稿においても、拙著で述べた「和解・共生」に関する以下の定義を踏襲する。
「戦争当事者の国ならびに市民社会レベルにおける『加害』、『被害』という双方の立場は異なるものの、ナショナルなレベルを越えて戦争の悲惨さ・非人道性という共通項に着眼することで、ナショナルなレベルからの視点につきまとう『憎しみ』を克服し、トランスナショナルなレベルで『加害』側、『被害』側双方の間における相互理解を育み、『報復的思考』の克服と『戦争の悲劇』防止の立場から、戦争を記憶し、『非暴力・平和の世界』を創造する『戦争の克服』に向けた営みを意味している」。藤本 [2014: 225]
4. 「少額無担保融資」プログラムについて詳しくは、藤本 [2014: 241-243]。
5. Chuong [2015: 2]。本ペーパーは地元のジャーナリストのレー・ヴァン・チュオンによって書かれ、2015年12月4日に開催されたクアンガイ省人民委員会対外関係局主催の会合に提出されたものである。本ペーパーはファン・ヴァン・ドーから提供いただいた。
6. Chuong [2015: 2]
7. ここに掲載した三つの写真は、ベイムから2014年2月20日付筆者宛電子メールにて提供されたものである。これら三つの写真の本稿への掲載を許可いただいた本写真撮影者のファン・ヴァン・ドーに対し感謝の意を表したい。
8. Chuong [2015: 2]
9. 2014年2月20日付、ベイムから筆者宛電子メール。
10. Boehm [2016]
11. Madion Quakers, Inc. “Our Projects: Wells for Water.” [2013]
12. Boehm [2016]
13. *Winds of Peace* [2001: 3] 参照。
14. トンプソンは2006年に逝去しており、2008年3月の「ソンミ虐殺」40周年記念式典には参加していない。
15. 藤本 [2014: 287]
16. 藤本 [2014: 298-300]
17. ヴォー・ティ・リエンは、ハノイでは1969年2月27日にハノイ駐在外国人記者の前で自らの経験を語っている。リエンについては、早乙女 [1992a: 61-63]、同 [1992b: 76-91] 参照。他に、

『朝日新聞』[1969]がある。また、「ソンミ虐殺」の実相について克明に描いた *Four Hours in My Lai* (Penguin, 1992) の著者マイケル・ビルトンとケビン・シムがこの著作のもとになったテレビ・ドキュメンタリーを制作する際にヴォー・ティ・リエンにも取材インタビューを行っている。リエンの証言内容は、他の取材内容とともにアーカイブズ資料 (Papers of *Four Hours in My Lai*, television documentary archives, 1964-1992) の中に収められている (Liddle Hart Centre for Military Archives, King's College London 所蔵)。リエンの夫は彫刻家で、ヴェトナム戦争終結1年後に「ソンミ虐殺」の現場に建立され、「ソンミ虐殺証跡公園」(Son My Vestiges Area) 内に置かれている高さ約5メートルの彫像、ソンミ虐殺慰霊碑の制作に携わった。

18. Boehm [2002]
19. VietnamNet [2013]
20. この点詳しくは、藤本 [2014: 273-281]
21. Chuong [2015: 2]
22. Turse [2013]
23. 伊藤 [2013]

参考文献

- 『朝日新聞』「『家族18人を殺された』ソンミの虐殺 ハノイで生残り少女語る」1969年11月28日付朝刊。
- Boehm, Mike. "Vo Thi Lien: A Spirit Watches over the My Lai Peace Park." *Winds of Peace*, #9 (May 2002): p. 7.
- . "Projects since 2011." unpublished paper (February 2016).
- Chuong, Le Van. "A US Veteran Alongside with Quang Ngai Farmers for 20 Years for Poverty Reduction." unpublished paper (December 2015).
- 藤本博『ヴェトナム戦争研究——「アメリカの戦争」の実相と戦争の克服』法律文化社, 2014年。
- 伊藤正子『戦争記憶の政治学——韓国軍によるベトナム人戦時虐殺問題と和解への道』平凡社, 2013年。
- Madion Quakers, Inc. "MQI Vietnam."
<<http://www.mqivietnam.org/>> (2016年1月30日閲覧)
- . "Our Projects: Wells for Water." March 2013.
<<http://www.mqivietnam.org/wells-for-water>> (2016年2月16日閲覧)
- 早乙女勝元『再会 ベトナムのダーちゃん』大月書店, 1992年 (a)。
- 早乙女勝元編『ベトナムに春近く——ダーちゃんリエンちゃんの哀歌』草の根出版会, 1992年 (b)。
- Turse, Nick. *Kill Anything That Moves: The Real American War in Vietnam*. New York: Metropolitan Books, 2013. 布施由紀子訳『動くものはすべて殺せ——アメリカ兵はベトナムで何をした

か』みすず書房, 2015年.

VietnamNet. "The Photographer of My Lai Massacre Meets Witnesses." March 18, 2013.
<<http://english.vietnamnet.vn/fms/society/69037/the-photographer-of-my-lai-massacre-meets-witnesses.html>> (2015年12月3日閲覧)

Winds of Peace. "A Celebration of Life! The Boy from the Ditch Reunited in My Lai with His Rescuers." #7 (April/May 2001); p. 3.